

道の案内記⑦

萱田道Ⅱ

木下道から飯綱神社へ

【島田台から飯綱神社まで・道のり約 4.3 km】

【見どころ】睦村道路元標・「庚申さま」の石碑・島田の馬頭観音道標・島田大宮神社・妙泉寺・桑納神明社・妙見神社・六蔵街道・桑納三叉路道標・薬師堂・威光院・麦丸大師講道標・東福院・日枝神社・辺田道沿いの小祠・権現下の道標

国道 16 号線島田台のバス停に降りたつ。ここは木下道との交差点、車の轟音は絶えることがない。昭和 34 年開通の 16 号線の恐るべき交通量には、おもわずたじろいでしまう。

北からの「萱田道」は、この交差点の北東 600~300m 向う側の 3 基の道標 (H06・H07・I01) から続いている。とはいっても、今は 16 号線が大きく分断し、残念ながら古道のたたずまいを味わうことはむずかしい。そこで、島田台交差点のバス停より木下道を少し西へ行った旧睦村道路元標から、歴史的な風情を残す萱田への古道をご案内することにしよう。

この南北の道は国道 16 号線が通るまで、千葉から木下道を結ぶ幹線道路だった。その役割を終えて今、道は人にやさしい静かな里道にもどり、伝説と自然と人々の信仰の息づきを伝えてくれている。

1 旧睦村道路元標から旧郡道に行く

島田台交差点から木下道を西へ 250m 行くと、右側に中華レストランがあり、その左手に 25cm 角高さ 63cm ほどの白御影の石柱がある。大正 10 年 (1920) に立てられた旧睦村道路元標 (I02) である。

道路元標とは村と村の間の距離を測る基準として、大正 8 年 (1919) の旧道路法公布時に設置を定められたもの。普通は、村や町の役場の前に立てられた。でも睦村の役場はここにはない。その謎を考えながら、ここから車の往来激しい木下道を横断し、「萱田道」を南へいく。

道路元標の向かい側から入るこの道は、大正のころの郡道「睦 千葉線」。「千葉郡誌」によれば「長さ 4 里 9 町、幅 2 乃至 3 間」で、ここから萱田、横戸、作草部を経て千葉に続いていた。またこの道は「地方開発上枢要なるも坂路多く、不便少なからざるものあり」「大正 10~11 年度に改良工事を施し、交通至便となった」という。

道路元標は、県道木下道沿いのこの旧郡道の起点に置かれているようだ。

2 島田の「庚申さま」

畑の中に住宅、個人の墓地などが点在する旧「郡道」を 300m ほど行くと、島田台と島



木下道に立つ道路元標 (I02)



島田「庚申さま」石塔群

田の境、変形四差路にでる。角に道祖神の祠、そして左には、道沿いに石塔が並んでいる。その数 24 基、「庚申さま」と称されるじつに壮観な石塔群である。

列の右端、笠付の石塔の銘を読んでみよう。「南無妙法蓮華経」造立は「天和二年」。銘の下、1面に1匹づつ三猿が彫ってある。向かいの睦北保育園の園児が見たら、「いないいないばあ」をしているお猿さんと思うだろう、そんなじつにかわいらしいしぐさの素朴な猿の彫刻である。

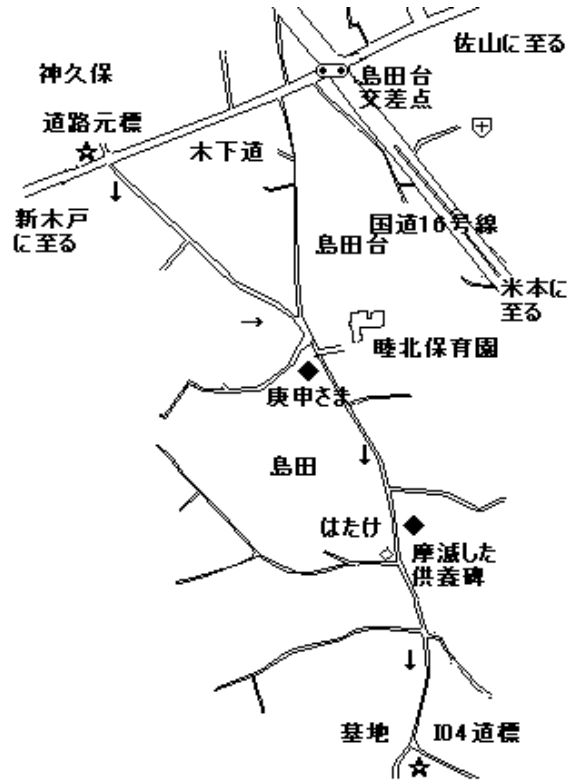
三番目は同文銘で、青面金剛のレリーフ。また「下総国神保領嶋田村講中」が寄進の碑には「奉信敬帝釈天王」と刻まれている。さらに「南無妙法蓮華経庚申塔」という石碑もあり、これらはほとんどが庚申塔、それも日蓮宗に特徴的な像容と銘文が右から古い順に一揃い並んでいる。

さらに庚申塔群の間には、二十三夜塔がいくつかあり、そのうち、元禄のは「奉信敬禮大月天子」というまさに日蓮宗独特の銘である。

ここ島田は、銘文にあるように「神保領」の一部であった。「神保」の語源は古代からの伊勢神宮の御厨のこと、そしてその範囲は神崎川の西で新川の北側、平戸・佐山・真木野から船橋市の小室・行々林に広がっていた。

これら嶋田や真木野、古牟呂（小室）などの地名が、中世「中山法華経寺文書」、千葉胤貞の譲状に登場してくる。内容は、臼井庄のこれらの地を胤貞が、中山法華経寺3世日祐に与えるというもの。こうして法華経寺の支配となった神保の寺々は、次々と日蓮宗に改宗し、神保十ヶ寺（後に周辺寺院を入れて13ヶ寺）という特徴ある信仰文化圏をつくりあげていった。

この「庚申さま」は、島田のそんな歴史と文化を反映している石塔群である。



みざる・きかざる

3 路傍の道標

さすがの「郡道」も庚申さまを過ぎると、道が細くなる。高い台地上の畑の中を行くと、摩滅して小さくなった路傍の石塔に、そっと花が手向けてあったりする。銘を読もうと思っても、「無」一字しか見えないけれど、おまつりする人のやさしきは伝わってきた。

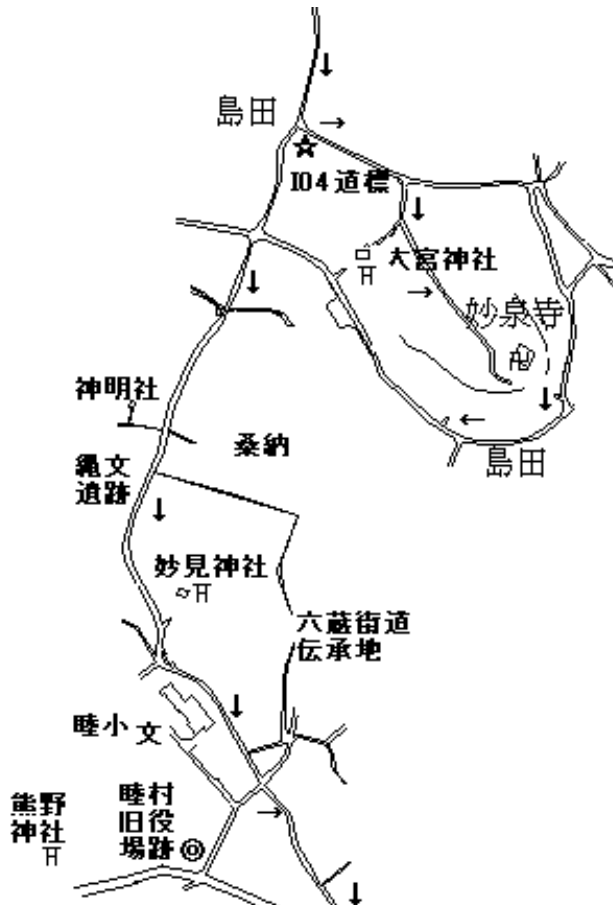
やがて両側墓地の間を通る。大きな切り株の列が道端に残っているところをみると、以前はさぞ暗い心細い道だったことだろう。

その先の三叉路にぼつんと**馬頭観音の道標(I04)**がある。右面の銘は「右 萱田町ヨリ大和田千葉道」、左面は「平戸橋ヨリ佐倉道」そして正面来た道は「北 白井道」。造立は明治23年(1895)である。

じつは私自身、この道標にはげまされたことがある。数年前の正月、自転車でひとり、八千代八福神めぐりをして、車の多い16号を避け、慣れない旧道を走っていた時だった。小池の帰りに日が暮れ、たちまち暗くなって地図も確認できない。泣きたいほど心細かったその時、分れ道にすくと立つこの道標に偶然出会った。今なおその役割をはたしてくれる道しるべであった。



島田三叉路の道標(I04)



4 島田の大宮神社と妙泉寺

道標に従うと萱田方面へはこの角を直進し、S字カーブの坂を下りるが、ちょっと左に曲がって台地上すぐのところにある大宮神社と妙泉寺に寄り道をしてみたい。

島田村のウブスナ、大宮神社へは道標の角を左折、100mほど行って廃車センターの前の小道を右折し、お宮の裏側から境内に入ることができる。境内の南側は断崖で、下の辺田道の鳥居からは急な石段がついている。

集会所風の拝殿の後ろに、小振りではあるが立派な本殿が鎮座。手前に記念碑があり、昭和58年7月雷雨暴風のため前の本殿は倒壊し、翌年3月に改築したという。祭神は伊勢神宮に奉仕する旧神保領だけあって、天照皇大神をまつる。

神社の裏を右に 200mほど行くと、島田の村人の旦那寺である**妙泉寺**がある。宗旨はもちろん日蓮宗。この神仏の組合せは、古代の神保領、かつ中世からは中山法華経寺寄進地という島田とその北西に広がる村々の象徴でもある。

それにしても妙泉寺は、東南西の三方が崖という台地の先端に位置している。この地形は、どうみても中世の城砦址だ。市博物館の図録に「妙泉寺城址」とあるのはここであろう。

上からのぞくと垂直のように感じる急な石段があり、ここを降りると、千部講が立てた明治 40 年の水難者供養の石塔と、平成 9 年大川施餓鬼の高い角塔婆がある。千部講というのは、千部の経典を読誦する法要の講のことで、中山法華経寺を本山とする旧神保領 13 ヶ寺で今も続けられている。

2 基の標柱は、水難者を供養するとともに、印旛沼の洪水の恐ろしさを今に伝えるモニュメントのようにも感じられた。

妙泉寺前の辺田道を右に行く。すぐに「Imanaka」という軽食レストランがある。このコースで休憩できるのは唯一ここだけなので、疲れたらお茶にするのもおすすめ。ひなびた風景の中、とてもしゃれたお店である。

5 桑納の神明社と縄文遺跡

大宮神社の下を通ると、道標から萱田へ向かう本来の道と出会う。左折して小さな谷津を渡ると、そこは桑納、ここには史跡が幾重にも重なっていて、先史時代から現代まで日本史の教科書をおさらいするような道がつづく。

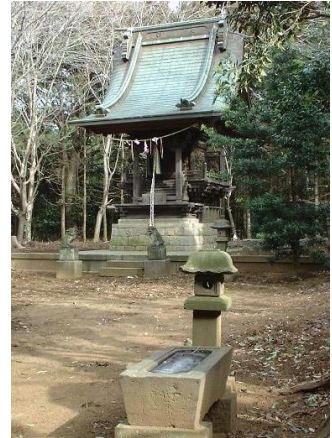
桑納の台地、睦小学校に向かってひろびろと開けた畑の中を、南へ向かって幅広い道が通り、右には伊勢御厨ゆかりの**神明社**の小さな森が、左には**妙見神社**のこんもりした森がある。

まず右の神明社への農道を歩いてみよう。道の両側には今でも縄文土器のかげらを見つけることができる。この小道の左の畑で、10cm ぐらいの大きさの土偶の頭が出土した。「みみずく土偶」という類型のめずらしいもので、今は市の博物館にあるらしい。

6 妙見神社と伝承の六蔵街道

道の左側、睦小学校の向かいに桑納のウブスナ**妙見神社**がある。樹齢三百年以上の古木に囲まれているが、社殿は新しいコンクリート製、昭和 54 年台風による倒木で全壊、旧社殿の彫刻の一部を壁にはめ込み、翌年再建したという。

祭神の天御中主尊は、千葉氏がその守護神として奉る妙見神のこと。中世のころ、千葉



大宮神社



妙泉寺



桑納神明社

一族に連なる土豪が居を構えていたのであろうか。

このあたりを丸畑、その西側を宮山といい、「千葉郡誌」には、桑納と桑橋の低地に人々が住む以前、天正年間まで丸畑と宮山には屋敷跡が数多くあったと書かれてある。

里の伝承によると、丸畑に六つの白壁の土蔵をもった長者が住んでいた。ある旧正月に、機織が泊まって長者を殺し（一説には、長者が機織を殺し）車井戸にほうり込んでむしろをかぶせた。これ故に長者の家は絶え、以来桑納の人は、白壁の土蔵を建てない、車井戸は使わない、正月中はむしろを織らないなどのタブーを伝えてきたという。

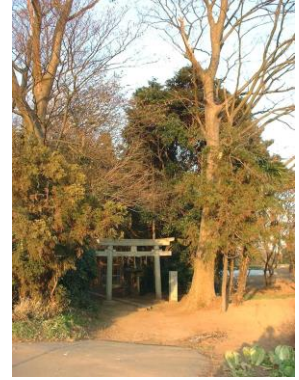
六つの蔵をもつ長者屋敷に通じる道は**六蔵街道**と呼ばれ、妙見神社の裏から横を通る農道がそれだとのことであった。

守りやすい台地上によぎなく住まわざるをえなかった戦国の世が過ぎて、人々は台地からから、便利な辺田道沿いの低地へ下りたのであろうか。あるいは掘って立て柱の土間の住居から、礎石上の柱に床を張った住居にかわっていくのに伴い、低地に住まいするようになったのであろう。やがてかつての台地上の生活の場は忘れられ、残った屋敷跡のふしぎな遺構に長者伝説が生まれたのであろうか。

ひろい通学路を睦小の子供達がはしゃぎながら通って行く。1977年から79年、この小学校の新築に際して発掘調査が行われ、奈良平安時代の多数の住居址・掘立柱建物の跡や墨書土器などが発掘されて、**睦小学校北方遺跡**と名づけられた。

道は睦小学校沿いに南下する。この小学校の西角にかつて明治22年にできた睦村の役場が置かれた。睦村の村域は、北は佐山から吉橋、南は麦丸に至る地域。役場跡には、四方からの里道が集まっているが、県道なみの枢要道ではない。そこで、本来ここに据えられるべき道路元標を、この郡道を北上して交差する県道の本下道沿いに置いたのであろう。

どこを掘っても遺跡が出るという桑納の台地を通り、桑納川に向かってさらに道は続く。



桑納妙見神社



伝承の六蔵街道

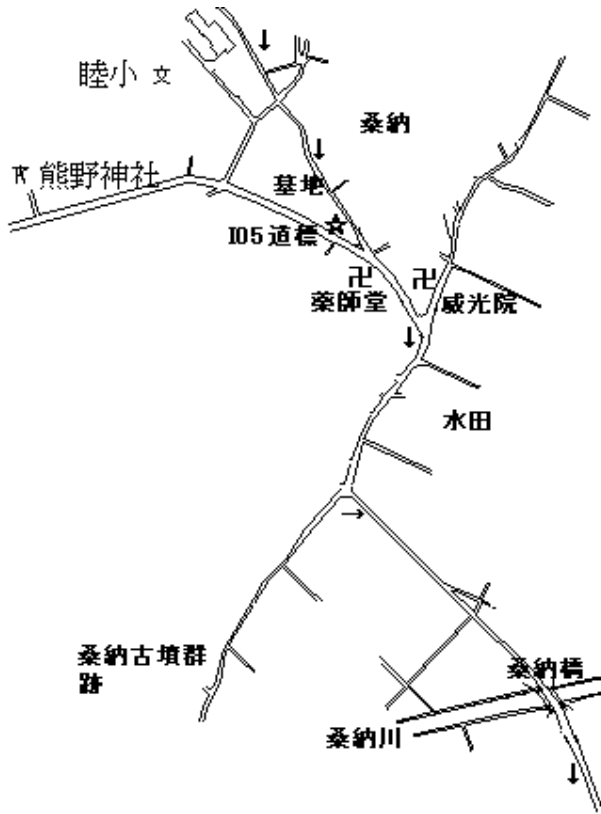
7 桑納三叉路の道標と忠魂碑

道は、ゆるい坂を下り、Y字状の三叉路にでる。Y字の角には、大小2基の石碑、さらにこの背後には馬頭観音塔が並び、その上一段高いところに中世の板碑も眠っていた古くからの墓地がある。

手前の石碑は**道標 (I05)** で、右には「志またより 志また新田 志ろい」、正面には、「成田山不動明王 大和田道」、左には「金掘だい 神保新田 かまヶや ミち」と刻まれ、寄進者は「當村 矢部新左衛門」なる個人、紀年銘はない。

この道標に比して数倍ぐらいの威圧感で、「**忠魂碑**」が後ろに立っている。「昭和御大典記念」と刻まれ、揮毫は「陸軍大将一戸兵衛」。昭和という時代、そして世界戦争の20世紀を象徴するようにこの巨大な石碑は残っていくのだろうか。背後の墓地の矢部家の墓碑

には、「於北支戦死 昭和十六年 行年二十六才」と記されてあった。これもまた一つのムラの歴史である。



8 「八千代ふるさと 50 景」の薬師堂

三叉路合流点の右に崖上の登る階段があり、この上には「八千代ふるさと 50 景」に選ばれた桑納薬師堂がある。このお堂の中の薬師如来は33年に一度その姿を見ることができる秘仏。病や苦悩を取り除くといわれ、桑納周辺の人々の信仰があつい。

境内の入り口には四国霊場七十五番写の大師講供養塔、その前には「厳島神社・出雲大社・天橋立」と大きく刻んだ参拝記念碑が立っている。市販地図でここは「厳島神社」と記されているが、おそらくこの参拝碑をこのお堂の標石とまちがえたのだろう。

ここには厳島神社に関連した言い伝えも、古祠もないのだから。



桑納三叉路道標(105)

9 威光院の「ホーキドウ」

道は、やっとなん川ほとりの辺田道に達する。萱田へはここを左にまがるのだが、右へまがり、**威光院**に寄り道しよう。

威光院は真言宗、桑納の村人の旦那寺であったが、今は堂宇もなく、地区の集会所になっている。

手前左側、大師講のお堂の後ろに、忘れられたような宝塔がある。「ホーキドウ」正しくは「如法経塔」という。「奉納妙法蓮華經一字一禮書写之所法師宥観」紀年は「元文四巳未年十月」と刻んであり、一見すると「妙法蓮華經」と日蓮宗の宝塔のようである。しかし、相輪の下の露盤四方に、この塔自体が胎藏界大日如来を意味する梵字も彫ってある。大日如来は真言の教義である。真言宗の寺でありながら、神保領中山法華経寺供養地に隣接する村の寺院として、よほど複雑な事情があったにちがいない。

この「複雑な事情」は、かつてこの村のいくつかの家に「半檀家」という制度を伝えてきた。男は島田の妙泉寺、女は威光院という「一家に二つの寺」である。半檀家は萱田でも「カタボッケ」といって過去にあったという。



桑納薬師堂



威光院のホーキドウ

10 桑納古墳群と埴輪

集会所の中に入ると、**桑納古墳群**発掘調査の写真が飾ってある。

威光院を出て、辺田道を左に曲がり、桑納橋に立ち、後ろを振りかえってみよう。

左手の桑納の台地上から、2基の古墳が発掘された。径 255mの円墳の1号墳からは剣や刀、鉄鏃などが、また2号墳の長さ 34mの前方後円墳からは、髷を結った女人など多数の人物埴輪が出土した。

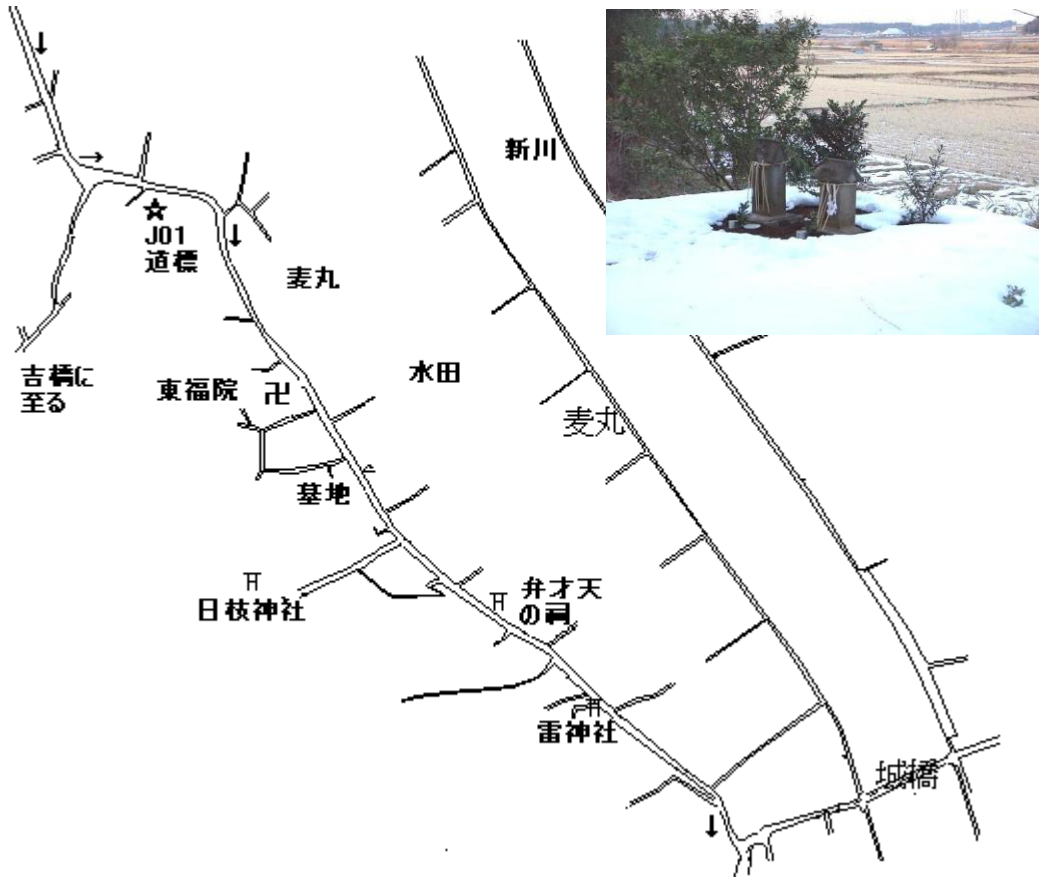
その写真の埴輪、どこかでみたことのある気がする。そう、髷を結った女人と男子像は、長く当会の「史談八千代」の表紙をかつて飾っていた埴輪像だった。現在は市の郷土博物館に展示されている。

11 麦丸の辺田道

ひろい桑納川の河川敷を渡り、麦丸の台地にぶつかった所に、小さな**大師講の道標**(J01)がある。「東城橋」指示に従い、左に新川沿いの辺田道に行く。これまで台地上を通ってきた道と、異なる風景がひろがる。

やがて右手にて**醫眼山東福院**がある。麦丸の旦那寺で、山門は右へ曲がった小道から入った所。光背のある六地藏、その右には半端になってしまったのだろうか、享保 18 年銘の丸彫りの地藏が 2 体が仲良く並んでいる。

左手に趣のある仏堂、正面には昭和 59 年に落慶したコンクリート造りの本堂があり、記念碑によれば、この寺は「宝暦 3 年約 250 年前吉橋の貞福寺住職長慶による開基」だそうだ。



仏堂の右には、りっぱな宝篋印塔、その横に「大東亜戦争」の戦没者を偲ぶ「鎮魂碑」がある。裏の銘を見ると、17人の名があり、そのうち9名は昭和20年の終戦直前の戦死である。「麦丸の昔話」という小冊子は、この小さなムラの17名の戦死者のリストから始まる。屋号や年齢を見ると、1軒で2名さらに3名を喪った家もあり、またそれも多くは二十歳代の死。これはムラの歴史にとって、心にとどむべき最大の出来事だった。

この冊子には、萱田を通して大和田駅まで出征兵士を送った道のことをこう書いている。

「今のような舗装道路ではなく、牛馬車の軌道跡がくっきりと二本筋がついていたものだった。砂利も入ってなかったので、雨でも降ろうものならもう泥んこ道になった。」

この道を今は快適に歩き、さらに南へ行く。

麦丸東福院

江戸時代からの古い墓地の先、農協の看板のある辻を右へ上がって行くと、麦丸のウブスナ日枝神社がある。境内には本殿の前左右に富士講の塚、高さたった1m足らずのお山

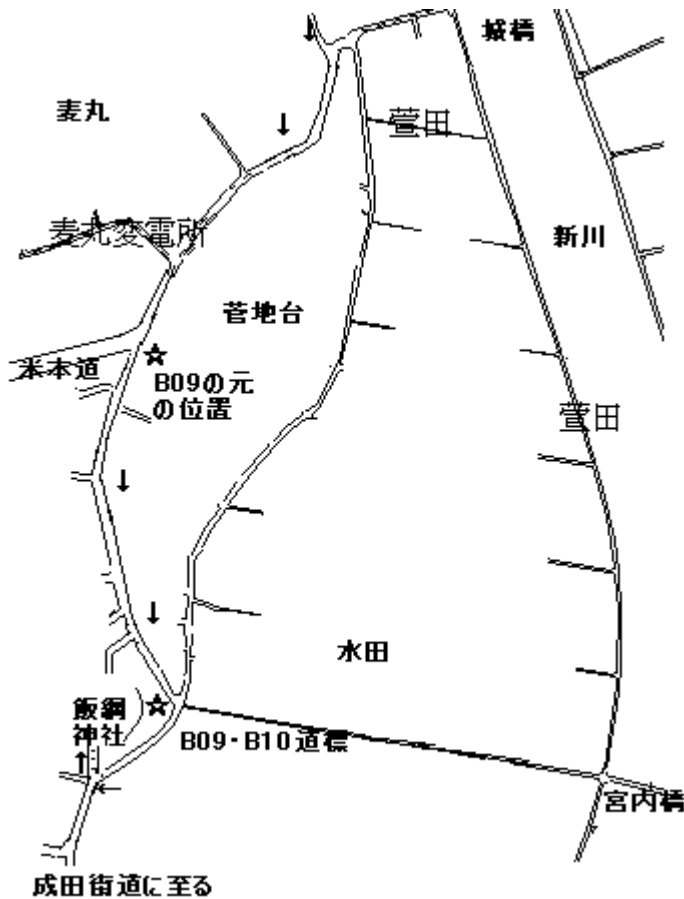


がある。この神社と東福院に奉納されていた三匹獅子舞は、昭和 25 年ごろ笛の吹き手がいなくなり、行われなくなってしまったという。

辺田道に戻りさらに行く、新川を望む道の縁に小さな石祠が二つ奉られている。

「水龍宮」と「弁財天」、ともに印旛沼の水神へ
麦丸・小祠のある風景
切実な祈りが込められているのだろう。旱天でも、まして大雨なら一層、ムラの生活は印旛沼の水位に脅かされた。この水への慄きと祈りは、沼の辺田道沿いのすべてのムラに共通する。

「雷神社」という祠の前を通る。雷もまた天のもたらす恵みと脅威。2000 年の夏、飯綱神社裏手の大木に雷が落ちた。印旛沼の周辺は地形的に落雷の多いところなのだろうか。



12 菅地台を廻って権現下へ

城橋西側の交差点で、この道は車の流れにまた遭遇する。気をつけて右折し、東電変電所の前の坂を上がり、大きな三叉路を直進する。右から来る広い道は、成田街道から城橋を通る「米本道」である。ここ菅地三叉路に飯綱権現下へ移された「いつなごんげん宮江三丁」の道標（B09）があったと聞く。

左手の台地、古墳が眠っている菅地台を半周し、道はまた新川に向かって下り坂になる。

この道は、やがて権現下で城橋からの辺田道、宮内からの道と交差する。ここ「タナヤ」にあったという涌き水の池はなく、今は15基の石塔が集められて整然と並んでいる。「右に舟橋 左に大和田 みち」銘の万延元年(1860)の**庚申塔 (B10)**のほか、「米本道」との分岐、菅地三叉路にあった安永2年(1773)の「是より左けミ川道 いつなごんげん宮江三丁」「右舟はし道」の**道標 (B09)** もここにある。江戸時代を代表する立派な笠付の青面金剛の刻像碑である。

その右となり、三面の各真中に1匹づつお猿さんを浮彫りにした庚申塔がある。島田の庚申塔と共通するものがあるが、より三猿中心の古い様式の庚申塔のようだ。いずれもなかなかの石塔、じっくりと鑑賞したい。飯綱神社の急な石段はすぐ先である。

蕨 由美



「いつなごんげん宮江三丁」道標 (B09)